

[制作記録]

西山産業との産学連携授業 －牛首紬の研究と制作－

Industry-Academia Collaboration Lesson with Nishiyama Industry :
Research and Production of Ushikubi-Tsumugi

足立 真実 ADACHI Mami
大高 亨 OHTAKA Tohru

はじめに

石川県の伝統工芸の一つ・牛首紬は白峰地区（旧牛首村）で織り継がれている絹織物である。平安時代末期に源氏の落人の妻が機織りの技に優れて、技術を村人に教えたのが始まりといわれ、霊峰白山のふもとに800年の伝統を受け継いできた。その特徴は素材の繭にある。二頭の蚕が共同で1個の繭を作り上げた玉繭を使用しており、今も手作りの伝統を守り続け、1979年に石川県指定無形文化財、1988年には国の伝統的工芸品に指定され、現在は2軒の織元が牛首紬を生産している。

2021年、株式会社西山産業と金沢美術工芸大学の
大高亨教授との交渉で連携を組むことになった。玉繭から直接手挽きする玉糸を西山産業に提供してもらい、学生の現代の感覚による「縞・格子」の着物を制作し、織った裂地を西山産業にお渡しすることにより新しい可能性を探るという目的である。

金沢美術工芸大学工芸科の染織コースでは3年生の選択授業として紬織着物の制作の演習を設定しており、毎年数名が取り組んでいる。着物の制作工程を学ぶだけでなく、原料の提供を受けることで手仕事の地域性に触れる機会を得ることとなった。大学での着物制作工程・西山産業が牛首紬を生産する白山工房を見学・ギャラリーでの展示など、牛首紬と関わった3年間の取り組みを報告する。

大学での織物制作工程

染織コース3年生のうち「着尺の製織」を選択したのは、1年目3名、2年目6名、3年目3名。まず天然繊維の絹について性質や繭の種類、他の繊維との違いなど基礎的な知識を学ぶ。また、着物の地域別の特徴や歴史的背景、着尺反物から着物の形に仕立てることを学び構造についても理解する。

一反の着物を制作する織規格として、整経：16m、経糸本数：1,050本、箆密度：50羽と設定。糸は1年目と2年目は経糸に西山産業提供の生糸、緯糸には京都西陣から購入する手紬真綿1100回生糸1本付（中国産）を使用、このときは玉糸の扱いが初心者には不安があったので経糸のみを提供いただいた。3年目は緯糸に西山産業の玉繭から紡がれた玉糸を使用することに挑戦した。

着物制作のための設計を学生それぞれの希望するデザインに合わせて計画し、作業工程に入る。

経糸染色

経糸の生糸には1・2年目は2800回転の総で一人5総を、3年目は1000回転の総を15総使用した（西山産業の経糸は一総が大きくて糸巻きに苦勞したため、回転数が少ない京都西陣から購入の糸に変更）。染色には天然染料を使用する。1,050本から色毎に経糸本数・総数・染料の必要量を計算して染色する。藍・紅花・玉葱・栗・梔子・コチニールなどから色素を染め移した絹糸の美しさに魅了されていた。

糊付け

経糸は片撚りなので毛羽立ちを防ぐために糊付けが必要。ふのりと正麩を使用して糊を作り、糊付けして糸同士がくっつかないように捌いて乾燥させる。

糸の巻き取りは総を御光にかけ座繰りを用いて木杵に巻き取る。2800回転の糸は1総の量が多くて糸を引き出すのに引っかかりスムーズに進まずかなり苦勞する学生がいたので、絹糸巻き用のたたり（三本柱に総糸を掛ける装置）も使用した。



総から木杵に巻き取る

整経

木杵から大管に巻き取る作業を経て、整経台で経糸本数1,050本を16mに引き揃える。デザインによって色の切り替わりが多いものは糸を度々切るので手間がかかる。ドラム整経機を利用する場合もある。

経巻

着尺の幅だしのため経糸を25羽の箆一目に4本ずつ通す仮箆通しをして、経巻台にセットし一定の張力を与えながら千切に巻き付ける。

経糸一本ずつが交差した綾を目安にしながら順番に綜統通し・本番用箆通し（50羽）をして機掛け完了。

緯糸染色

天然染料で色別に染める。一色の場合、一度に同じ色に染めるのは難しいので、二色の濃淡に染めて織り交ぜることにする。1・2年目は真綿糸だったが、3年目に玉糸を使用した際は糸巻きが難しく最初は総を荒らした学生もいたが、徐々にコツを掴みスムーズに巻けるようになった。

製織

小管に緯糸を巻いて杼にセットし、デザインに合わせて織る。経糸のテンション・織耳の緩みまたは引き攣り具合・織機に向かう姿勢など、注意しながら約13mを織り上げる。



製織

仕上げ加工法

糊を除去するために着尺の湯通しをし、張り木で両側から引っ張って伸子をうち乾燥させた後、アイロンをかけて織面を整える。（専門の業者に発注も可）展示用に仮仕立てする。着物の構造を理解して一反の布を身頃・袖・衿・衤のパーツに裁断し、縫い合わせる。展示映えするように本仕立てよりも大きめのサイズに、後にほどこきやすいように縫い目は粗く縫う。



湯通しした後の伸子張り

白山工房見学

牛首紬を生産する白峰地方の西山産業・白山工房では、座繰と呼ばれる繰糸から製織までの工程を見学することが出来る。学生は自分たちが着物を織る糸がどのように作られているのか、また牛首紬の織り手の職人の受け継がれてきた技を間近に見て学び、自身の制作と具体的に重ねて捉えていた。

座繰製糸

玉繭を約60個入れた湯釜から挽き出された糸を一つに束ねて一本の玉糸ができる。二匹の蚕が作った玉繭は普通の繭より約2.5倍大きくて武骨な形だ。糸を取るの二本の糸が絡み合ってしまう難しい作業だが、座繰製糸の方法で挽き出された糸は弾力性や伸縮性に富んだ糸になる。

右：玉繭から糸を挽く
下：玉繭(左)と一般的な繭(右)



八丁撚糸

木管に巻き取った糸から八丁撚糸機で経糸1mにつき280回、緯糸1mにつき150回の撚りをかけて木杵に巻き取る。

染色（先染め）

精練をした後の染色については牛首紬では元来植物染料による草木染めを中心に染められてきたが、堅牢度が常に問題となり、近年では「藍染」「くろゆり染め」などのごく一部の特殊な染めを除き、化学染料も使用している。しかしながら現在でも染色される色合いは植物染料から醸し出される色合いを基調とする。

整経

手作業で整経台を用いる方法と、必要に応じて大型のドラム整経機を用いる方法を使い分けている。

製織

織りムラを避けるため緯糸をセットした二丁の杼が交互に織り込まれるような仕組みになったバツタンの箆框を使用して織る。牛首紬の織り手は織機を操作すると同時に、緯糸に使用している玉糸が、その性質上織度ムラや節など製織に適さない部分を見極めながら織り進める熟練した技術を要する。



バツタンの箆框で織る様子

白山ろく民俗資料館見学

牛首紬が作られる地盤となる白峰地区特有の山村の生活を知ることが目的に見学した。

日本有数の豪雪地帯の厳しくも豊かな自然に囲まれた中での生活の様子を移築して保存された住居から知ることが出来る。江戸時代から養蚕を生業として発展した様子が養蚕の道具や資料の展示からくみ取れる。



養蚕を行っていた旧家を見学

ギャラリーでの展示発表

西山産業のご配慮により、金沢市東山のギャラリー三味にて学生の制作した着物の展覧会開催の運びとなる。東山茶屋街の町家をカフェギャラリーに改装された、部屋の壁が金沢建築に特徴的な朱塗りの和の空間で、仮仕立てした着物を衣桁に掛けて展示する。牛首紬についての説明の文章と写真のパネルも添えた。

初めての試みの1年目は展覧会タイトルを「絹のいろどり展」とした。和室での展示で着物を扱うのも初めての3名の学生には新鮮な経験となったようだ。緯糸に真綿糸と玉糸それぞれを織り込んだ二枚の布地の違いを見るための展示は、実際に触って感じてもらうようにした。

「袖振り合うも多生の縁」をタイトルにした2年目は、6名のコンセプトをリーフレットにして見る人に制作に込めた思いをアピールする工夫をした。

観覧は大学の関係者だけでなく、立地もあって観光客の来場も多くあった。学生はデザインだけをして制作は牛首紬の織元によるものと思った人もあり、大学の織機で織ったことを説明すると驚かれた。今後の展示は大学での制作の様子を紹介するパネルも必要と感じた。3年目の着物制作はすでに終了しており、展示発表を来春に控えている。

ファッションショー

2023年11月4日、本大学祭の美大祭で工芸科有志が企画するファッションショーに、2年目に制作した着物を本仕立てにしてモデルに着付け、ランウェイを歩くことになった。着物を着るために必要な帯や長襦袢、小道具、草履などの取り揃えを知るところからだったが、従来の着物の枠に捉われない個性的な着こなしをコンセプトに「シャツを着る感覚で」「花で飾るように」「紬とブーツの取り合わせ」といったカジュアルな着方を提案し、洋装のファッションの中でも一際注目を浴びていた。学生たちの年代では成人式の振袖或いは夏の浴衣などの華やかな柄の

ある染め物の着物が馴染みだが、紬織の着物はどのように映ただろうか。

今回はモデルが着装したが、制作した本人が着心地を実感できるような機会をつくり、さらには牛首紬が他の着物とどう違うか、特徴・魅力を感じてほしい。

まとめ

牛首紬は「玉繭を使用することで節のある部分が引っかけりとなり釘を打っても抜けないほどの強度がある」と例えられる。さらに生糸としての絹の光沢もあり美しい。白山工房で制作の現場を間近に見学したことで手織り特有の風合いを感じ取り、それを制作に生かすだけでなく、実際に着用する場をつくることまで学生たち自身が結びつけた。素材のルーツを知り着物への興味を深めることに繋がると嬉しく感じる。着付けの難しさに問題はあるが、「素材だけでなく着物の合理的な形を理解して和服の魅力に目覚め着用への展開になった」との声も聞かれた。着物への興味の一歩は、昔の生活の良い面に気付き現代に取り込むことのきっかけとなるのではと期待する。今後また新しい展開に繋がるよう続けていきたい。

各年初めて取り組む学生たちの着物制作なので作業がうまく進まない面や、着物自体に触れるのも初めてで展示の戸惑いなどもあり、西山産業に現代の感覚を提案するところまでは及んでいませんが、日本に伝わる産業に目を向ける機会を与えてくださったことに深く感謝申し上げます。

(あだち・まみ 工芸科/染織)

(おおたか・とおる 工芸科/染織)

(2023年11月8日 受理)

展覧会
カフェギャラリー三味

「絹のいろどり展」
2022年3月15日～22日



「袖振り合うも多生の縁」展
2023年2月16日～28日



ファッションショー
金沢美術工芸大学 体育館

美大祭
「FASHION SHOW 2023」
2023年11月4日

